

## 駆けだし記者がみた「寛容と忍耐」

島 桂 次

私と大平さんの出会いは、昭和三十年ごろ保守合同劇が大詰めになったころである。当時の私は、四年間の地方記者を終えて東京に帰ったばかりの「駆け出し記者」であった。私は池田派を担当していた。そのころの池田勇人氏は吉田学校の優等生で、ジャーナリズム、記者嫌いは徹底しており、毎晩、新宿・信濃町の池田邸に夜回りをかけても、若僧の私に対しては木で鼻をくくったような態度で、とても仕事になる状態ではなかった。

それでもこりず毎夜通いつめると、さすがの池田さんもうんざりして「俺と一心同体の大平君を紹介するから、彼の話聞けば俺の話聞くのと同然だ。そして君が一人前の記者になったら、俺がいつでも会ってやる」という。そんなことから大平さんの本郷の自宅に出入りすることになったわけである。

当時の私は、向う気が強く、酒びたりで、いったん飲みだすと留るところを知らず、文字通り「無法松」のような生活を続けていた。そんなある夜のことである。しこたま酒をのんで大平邸を訪れた私は、ご機嫌で、政治談義をするというより独りで勝手なことをぶつていた。「ご存じのように、おとうちゃんは一滴の酒ものまず、いやな顔ひとつみせず酔っぱらいの「たわごと」に黙々と耳を傾けていた。ときおり、コンペーターと綽名をつけられていた志げ子夫人が、心配そつに応接間に顔を出して、私をにらみつけていることは覚えていたが、時間のたつのも忘れてウイスキーのボトルを三分の二ぐらいあけたころ、ふとおとうちゃんが顔をあげていわく、「島君、もう夜が明けてしまったようだ。実は、これから羽田から飛行機で大阪に行く用事があるので失礼するよ」。

このとき、さすがの私も酔いもさめてびっくり仰天し、おとうちゃんに、両手をついて謝った。

のんだくれの駆け出し記者のたわごとを、五時間もだまって相槌をうつて聞いてくれるこの人は、いったい、どういう人なのか、これだけふところの深い忍耐強い人がいるだろうか。この時から、私はおとうちゃんがやがて必ず日本の卓越した指導者になると固く信じたのである。

それから数年、激動の政治的変遷を経て、六〇年安保騒動のあとをうけて池田内閣が成立する。岸内閣を退陣させた安保騒動は、国論を二分して保守、革新間に深い亀裂をもたらし、国民にぬぐい難い政治不信をうえつけた。さらに、そのあとをうけた総裁公選も、自由民主党に大きなしこりを残した。すでに、官房長官に内定していた大平さんは、池田さんと箱根の山荘にこもり組閣の構想を練っていた。

私も箱根におしかけ、その模様を取材していたが、おとうちゃんの車に同乗して帰京することになった車中の出来事である。車が第二京浜国道にさしかかると、うたた寝をしていたおとうちゃんは、ふと目をさまし、調子はすれのダミ声で当時流行していた歌謡曲「夜霧の第二国道」を口ずさんでいた。「鼻歌まじりで内閣ができるのですか」と皮肉をいうと、おとうちゃんはキツとした表情で「いま、私は池田さんと背負いきれない荷物を背負って、死ぬ思いでいる。私も池田さん凡庸な政治家かも知れないが、ただ政治を行う心構えだけはできています」という。それは何ですかとたまたみかけると、おとうちゃんは「寛容と忍耐だ」と答えた。まさに、大平政治そのものを端的にあらわした言葉である。

それから大平内閣が終るまで、私は政治家と記者という立場を超えた、人間としてのつきあいをいただいた。私は、おとうちゃんの知遇を得たことが、私の人生の大きな道標となり、心のはげましとなったことを感謝しています。おとうちゃん、どうぞ安らかにねむって下さい。